

論文審査の結果の要旨

氏名 福間具子

本論文は、ドイツ系ユダヤ人として、旧ルーマニア領ブコヴェーナのチェルノヴィッツ（現ウクライナ共和国領）に生を享け、ブカレストとウィーンでの一時的停滞を経て、パリに定住したのち、やがて自死するにいたるまで、ドイツ語で書きつづけた詩人パウル・ツェラーン（Paul Celan, 1920 - 1970）の詩作品をとりあげて、その構造ないし運動原理を解明しようとしたものである。

その際に、筆者が意図するところは、「静態的である言語テキストを動態として捉えなおし」、その動態を「再び伝達可能な言葉へ戻すこと」であり、ビューヒナー賞受賞講演『子午線』にもちいられている詩人自身の形容をかりるならば、「言葉を姿と方向と息として感じ取る」ことである。晦渋をもって知られるツェラーンの詩作品を読み解くにあたって、その意味論的な指示内容に拘泥することなく、そこに通底している言葉の動きに着目することは、たしかに効果的な方法であるといえるかもしれない。しかし、筆者の志向は、そのような実際的な判断に依拠するものではなく、まさにそうした局面においてこそ、ツェラーンの詩作品ないし詩学の本質が顕現することを証明するにあたる。『子午線』において、一方で「芸術」という同一化原理と、他方でそれを破壊する不条理の、二様の異様さ、筆者の訳語をかりるならば「異性 (Fremdheit)」が指摘されているが、その緊張関係において、筆者は、初期においてはシュルレアリスムにも影響された「先行」、中期においてはライブニッツの「モノイド」論に照応する多様さの総合、後期においてはフロイドへの親近性をうかがわせる「退行」と、それぞれの時期に特徴的な運動形態をみいだしている。しかし、そのいずれの位相においても看取されるのは、「詩 (Dichtung)」が「芸術 (Kunst)」を止揚することによって、しかるのち「詩作品 (Gedicht)」として回帰してくるといふ、「子午線」に寓意される、その消息である。

本論文は、難解なツェラーンの詩作品に対峙するにあたって、論証の展開そのものまでも、まま難解に陥っている憾みがあるが、参考文献を博搜しつつ、他方で首尾一貫した論理を構成しえた力量は、十分に評価されるべきものである。以上を鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。